

酔翁亭記

歐陽修

滁を環りて皆山なり。その西南の諸峯、林壑尤も美なり。これを望めば蔚然として深く秀でたるものは、琅琊なり。山行六七里、漸く水声を聞く。

潺潺として両峯の間に瀉ぎ出づるものは、醴泉なり。

峯回り路転じて亭あり。翼然として泉上に臨めるものは、酔翁亭なり。亭を作れるものは誰ぞ。山の僧智僊なり。これを名づくるものは誰ぞ。太守自ら謂ふなり。

太守、客と来たりてここに飲む。飲むこと少なくて輒ち酔ふ。而うして年又最も高し。故に自ら号して酔翁と曰ふなり。

酔翁の意、酒にあらざして、山水の間にあるなり。山水の樂、これを心に得て、これを酒に寓するなり。

もしそれ日出でて林霏開け、雲歸りて巖穴暝く、晦明変化するものは、山間の朝暮なり。野芳発きて幽香あり。佳木秀でて繁陰あり。風霜高潔にして、水落ちて石出づるものは、山間の四時なり。朝にして往き、暮にして帰る。四時の景同じからずして、樂も亦窮まりなきなり。

負へる者は塗に歌ひ、行く者は樹に休い、前なる者は呼ひ後なる者は応へ、僇僕提携し、往来して絶えざるものに至つては、滁人の遊べるなり。

溪に臨みて漁すれば、溪深くして魚肥えたり。泉を醸して酒と為せば、泉香しくして酒冽し。山肴野蔌、雑然として前に陳なるものは、太守の宴するなり。

宴えん酣たけなわなるの樂たのしみは、絲いとにあらず竹たけにあらず。射いる者ものは中あたり、奔えきする者ものは勝かつ。觥こう籌ちゆう交錯こうさくし、起坐きざして誼譁けんかする者ものは、衆賓しゆうひんの權よろこべるなり。蒼顏そうがん白髮はくはつにして、その中間ちゆうかんに頽くずる者ものは、太守たいしゆうの醉よるなり。

已すでにして夕陽山せきやうやまにあり。人影散乱じんえいさんらんするは太守たいしゆう歸かへりて賓客ひんかくの従したがふなり。樹林陰翳じゆりんいんえいし、鳴声上下めいせいじやうげするは遊人ゆうじん去きんちりて禽鳥きんちゆうの樂たのしめるなり。

然しかれども禽鳥きんちゆう山林さんりんの樂たのしみを知りて、人ひとの樂たのしみを知らず。

人ひとは太守たいしゆうに従したがひて遊あそび樂たのしみを知れども、太守たいしゆうのその樂たのしみを樂たのしむを知らざるなり。醉よふては能よくその樂たのしみを同おなじうし、醒さめては能よく述のぶるに文ぶんを以もつてする者ものは、太守たいしゆうなり。太守たいしゆうは誰たれを謂いふぞ。廬陵ろりやうの歐陽脩おうやうしゆうなり。